

告　　辞

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとう。青春の山や谷に遭遇しながらも君たちが、粘り強い研鑽を経て、見違えるようにたくましい人間に成長したことを讃えます。加えて諸君はこれまで受けた保護者の皆さまからの物心両面の支え、励ましによってこの日があることを、しっかりと胸に刻んでほしいと思います。

一．諸君は本学の経営情報学部で高等教育を受けたことに対し、誇りを持ってほしい。私どもはみなさんに高い水準の教養的専門的知識を教授し、「チームワーキング力」と呼んだ「他人と協働できる能力」、「組織で仕事ができる能力」の育成に力を注ぎました。私どもはこれによって、生涯を通じて自発的に学ぼうとする態度と学ぶ方法を身に着けることを求めました。

卒業は「学び」の終わりではなく、「自分で学ぶ」ステップへの新しい出発点です。二十一世紀は高度の知識社会、知識基盤型社会です。みなさんは生涯を通じてキャリアアップ、すなわち仕事の質を高めることを要請されます。知識を増やすこと、身につけた知識はみなさんに新しい可能性を生み出し、競争に勝ち抜く力を与えてくれます。さらに二十一世紀は「生涯学習社会」です。「自分の学び」は自己実現や生きがいを豊かに、そして実り多いものにしてくれます。学ぶことは決して苦痛ではなく、実に楽しいことです。

諸君は受け入れの企業、医療機関から大きな期待を寄せられ、社会人としての一歩を踏み出します。しかし、就職は新しいスタート地点に立つにすぎないことも事実です。それぞれの職場で、諸君は地道な努力を重ね、上司や同僚から厚い信用と信頼を勝ち取ってほしい。

二．諸君の旅立ちに際し、私は歴史的視点、つまり社会の動きを五〇年単位、一〇〇年単位で見る、考えることをお願いしたいと思います。世界を一世紀、一〇〇年単位でみると、常に二つか三つの大きな節目があります。二十一世紀には多くの人々が感じているように、二〇〇八年の世界同時大不況と二〇一一年の東日本大震災および福島第一原子力発電所の爆発事故の影響、対応が今後五〇年、半世紀の世界と私たちの生活の枠組みになりつつあります。

今年は戦後七〇年です。一九三一年の満州事変から太平洋戦争に至る一五年戦争が、一九四五年、日本帝国の無条件降伏によって終結してから七〇年目を迎えたということです。

去る九月一九日未明参議院において安全保障関係の十一本の法律が可決され、成立を見ました。これは戦後七十年の安全保障政策、別の言葉でいうと防衛・外交政策が基本的な転換を遂げ、今後五〇年、半世紀の枠組みとなる可能性が高いことを意味します。安全保障や国の防衛の問題は国民の多くがこれを深く理解し、合意を形成することがきわめて大切です。この政治課題に学生や若者、女性が広い関心を寄せたということは、日本の将来にとって大きな意義を持っています。

三．成美大学は二〇一六年四月から（仮称）福知山公立大学に移行する予定であり、その準備が着々と進められています。本学の公立化はこの運動の中心となってきた「公立化を支援する市民の会」の役割に負うものです。私たちは市民の会の皆さんに、深い敬意と感謝の念を重ねて表明致します。

本学の仮称・福知山公立大学への移行は、福知山、北近畿における大学の役割を飛躍的に高めることになると確信致します。日本政府が地方創生政策を中心政策の一つにしているのは、東京首都圏及び大都市圏と「地方都市・農村圏」の格差が著しく、これを解決しなければ祖国日本の将来を危うくするからにはかなりません。祖国の国土全体が荒廃し、国家的損失、国民的損失は計り知れないものがあるからです。成美大学・同短期大学部は福知山、北近畿の創生、産業の振興、教育福祉の充実にとって欠くことのできない大きな柱、そして重い柱です。私どもはこれまで「日本におけるオンリーワンの大学」を標榜してきましたが、中長期的に「世界に通用する大学」の建設も、決して夢ではないと考えています。

四．諸君に餞として「内賢外愚（ないけんげぐう）」、つまり「外見は平凡であるが、内面に優れる」という言葉を送ります。これは浄土宗の開祖法然上人のお言葉です。この意味は「外見は全く偉ぶるところがなく、凡庸に見えながら、内相、内面は大変優れていること」を指し、「人としての理想のあり方」を示す言葉です。私自身もなお遠く及ばないであります、絶えず自分自身に言い聞かせていることです。どうか永く頭の片隅にとどめていただければと念願いたします。私は、君たちの将来に大きな期待を抱いています。

みなさんが学んだキャンパス、母校はいつの日にか還る場所であります。母校は何時でも還ることのできる場所であることを、申し上げて学長告辞と致します。

2015年9月26日

成美大学 学長

経済学博士 内 山 昭